論文集及び予稿集の執筆用例

**1．原稿の書式**

・原稿は和文とし、別に指定するWordの「執筆用テンプレート」に上書きし、Wordで作成する．A4用紙に余白を上35mm、下及び左右30mmとする。

・横書きが原則で、39字×37行、明朝体10.5ポイント。英語、数字はcentury体にする。句読点は「、」と「。」にする。

・分量は、注・参考文献などを含んだ全体を12ページ以内とする。ただし、予稿集の場合は8ページ以内とする。

・原稿にはページ番号を挿入しない。

・原稿末尾に、執筆者の所属・役職（学生の場合は在学する学校・課程名など、ゴシック体、12ポイント）を記す。

・太字は用いない。

**2．標題・氏名などの書式**

・標題は原則としてゴシック体16ポイントし、第1ページの1行目中央に記す。副題については、文字の大きさは14ポイント。

・氏名は、原則としてゴシック体14ポイントとし、右に揃える。標題・副題から1行あける。

・キーワードは【キーワード】と表示し、明朝体10.5ポイント、5語程度。氏名から1行あける。

・要旨は【要旨】と表示し、400字程度、明朝体、文字の大きさは10.5ポイント。キーワードから1行あける。

**3．本文の書式**

・本文のなかで章・節等の記号をつける場合には、下記の通りにする。

|  |
| --- |
| 1．はじめに　………ゴシック体，12ポイント，以下同様  2．先行研究  3．調査及び分析結果  3-1　調査方法  3-2　分析結果  3-2-1　性別による分析結果  3-2-2　年代別による分析結果  4．おわりに |

・文献の引用は「～である（山田（2015）。」、「山田（2015:5-6）は～」、「山田・鈴木（2015:128）は～」のようにする。

**4．図表の書式**

　・図表の文字は明朝体で8ポイント以上とし、表のタイトルは表の上、図のタイトルは図の下で中央揃えにする。

**5．注及び参考文献などの書式**

・注及び参考文献は、明朝体10ポイントとする。なお、注の位置は脚注とする。参考文献には番号をふらない。五十音順に並べる。日本語・英語・その他の言語の順にする。本文中での参考文献の引用は、原則として以下のようにする。

|  |
| --- |
| 山田太郎（1997）『○○○』大修館書店  山田太郎・鈴木太郎（1977）『○○○』くろしお出版  山田太郎（2001）「△△△」『○○○』鈴木太郎（編），朝日出版，pp.44-79.  山田太郎（2005）「現代日本語における○○の意味拡張―概念的中心性と機能的中心性」『日本語文法』12-1，pp.1-17.  Norrick, N. R. (2000). *Conversational narrative: Storytelling in everyday talk*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.  Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (1984). *Interpersonal communication competence*. Beverly Hills, CA: Sage.  Dorian, N. C. (Ed.) (1989). *Investigating obsolescence*. Cambridge: Cambridge University Press.  Zajonc, R. B. (1980). Feeling and thinking: Preferences need no inferences. *American Psychologist*, 35 (1), 151-175. |

論文の提出：saitamagengoken@gmail.com